

感覚教育（グーツムーツ）を考慮した柔道整復教授法の研究

— モンテギア骨折授業の事例から —

Study of *JudoSeifuku* teaching methods, analyzed by consideration of “sensory education (Gutsu Mutsu)”.

— From “Monteggia fracture-dislocation theory” lectures —

体育学部健康科学科

猪越 孝治

INOKOSHI, Takaharu

Department of Health Science

Faculty of Physical Education

体育学部健康科学科

久保山 和彦

KUBOYAMA, Kazuhiko

Department of Health Science

Faculty of Physical Education

キーワード：感覚教育, 柔道整復, モンテギア脱臼骨折, 教授法

Abstract : The study of “Gymnastik theory of Gutsu Mutsu” was a place of a physical education methods and the principle studies, and has been performed father of the modern physical education flourishingly. Sensory Education had been regarded by the modern Germany style of physical education. We took advantage of the “Sensory Education”, we tried the practice of the “*Judo-Seifuku*” methods of education. Because we are the teachers of the physical education department. As a result, these “sensory education” got to effective for tradition of the *JudoSeifuku*.

Keywords : Sensory education, *JudoSeifuku*, Monteggia Fracture-Dislocations, Teaching methods

要約：近代体育の父「グーツムーツのギムナスティック」の研究は、体育教育法や体育原理研究の場で盛んに行われてきた。これは、近代ドイツ式体育教育の原典にあたり「感覚教育」を重要視したものであった。我々は、グーツムーツの健康（養生）教育法を検討し、体育学部の特徴を生かした、柔道整復教育法の実践を試みた。その結果として、この「感覚教育」は、柔道整復の伝承に効果的であるという感触を得た。本研究では、教育実践の実例を挙げ、感覚教育の「手段的価値」を論じていく。この事で、今後の伝承医学研究手法の提案を試みる。

はじめに

近代体育の父「グーツムーツのギムナスティック」の理論は、体育教育の中に、感覚教育 (Sensory Education) の必要性を説くものであった。これは、いわゆる運動器 (骨・関節・筋・神経) の体育訓練に留まらず、五感を対象に、感覚器 (目・耳・鼻・舌・皮膚) の訓練を行うものである。例えば、視覚の場合であれば、色々なもの長さ、高さ、幅、深さ、重さ、角度、広さ (面積)、大きさ (体積) を目測する訓練を行っている。つまり、この訓練の目的や、体育教育の目的には、「人間が健康に生きる」為の「身体教育観」 (本来の体育の意味) 構築へ向けられていた。つまり、

グーツムーツの目的は、ヒポクラテス以来の「養生の為の身体教育」 (健康保健教育学) 「伝統医学教育」等が、近代へ向かう中継地点であるはずであった。

しかし、発声訓練、感覚訓練の結果に対する評価法に問題があったと考える。それは、実際の計測器 (巻き尺・角度計等) で、実測した「正解」と比較して、人間の五感の「不正確さ」を揶揄する方向に実証され、受け取られ、結果、墮落した人間論 (ホモ・ルーデンス) へのあらぬ方向へ展開した。

筆者らが考える「五感を研く感覚教育」は、人間の感覚の誤りを正そうとするものではない。眼前の現象全体を受け入れようとする感覚の「経験的感性」を、人間の能力を最大限に評価し、育て、育んでいこうと

する本来の、養生教育の姿であり、ましてや、前述、ホモ・ルーデンスの実証には向けられていない。グーツムーツの感覚教育では、「目で測る事」と、「巻き尺で測る事」が、より誤差なくはかれる能力を訓練する事に向けられた結論に、人間の感覚は、元来不正確であり、測定可能な、機材で測れるものは正しい、とするものであったが、医学教育で、著者らは、この教育法に何ら反論の余地はない。しかし、前述の「感覚教育の評価（不正確）」に対しては再考の余地を提案する。それは、後にヤーンによって引き継がれた汎愛主義的教育法は、特に日本の「心身一如」を提唱する教育論者（猪越・久保山）においては、必ずしも肯定的に受け取れないからである。また、体育自体に対して「機械論的身体」の扱いや、「イデオロギーとしての体育」に活用されてきた事等を多く目にしてきた。

本研究では、人間の「経験知」を最大限に評価し、伝統的武道医学、武道（空手・柔道）の実践家で、指導者でもある2名（猪越・久保山）により、「ホモ・ルーデンスの発見」と評価されてきたグーツムーツの「感覚教育」を再考すべく、伝統医学論を論じた。その過程で「体育学部で養成される柔道整復師像」を論じていくつもりである。そして、考察する中から、「ネオ感覚教育法」の手段的価値を描出する。

モンテギア骨折について

モンテギア骨折は、脱臼と骨折を併発した損傷で、損傷に体する治療法は、観血療法を選択するケースが多い、ここでは、モンテギア骨折の説明及びバドの分類を掲載する。

Monteggia Fracture-Dislocations
Orthopaedic Surgery; B. Wiesel, N. Sankar,
N. Delahay, W. Wiesel, pp418-419

Monteggia fracture-dislocation refer to a fracture of the proximal ulna with an associated dislocation of the radiocapitellar joint. The direction of the radial head dislocation generally follows the apex of the ulnar fracture and forms the basis of the Bado classification (Fig.) Diagnosis can often be subtle, and for this reason, many Monteggia fractures are mistakenly diagnosed as simple ulna fractures. In the normal forearm, a line drawn along the axis of the radius should bisect the capitellum on every

radiographic view (Fig).

It is, therefore, imperative that elbow radiographs be obtained in all cases of forearm fractures so that this relationship is violated in all cases of forearm fractures so that this relationship can be adequately assessed. If this relationship is violated in the setting of an ulna fracture, then a Monteggia injury is present. As a general principle, it is the alignment and stability of the ulnar fracture reduction that dictates the stability of radial head reduction. Therefore, treatment of Monteggia injuries is guided by the ulnar fracture pattern. Plastic deformation of the ulna and incomplete (greenstick) fractures are treated with closed reduction and long arm cast immobilization. The forearm is usually supinated and the elbow flexed 90 degrees (although elbow extension may be necessary for Body type 2 fracture patterns). Complete transverse or short oblique fractures or comminuted injuries are best treated with open reduction and plate fixation. Regardless of treatment method, it is important that those fractures be followed closely to prevent loss of radial head reduction.

この前記資料は、近代的整形外科学の書物に記載されているモンテギア骨折の説明や、それを分類したものである。近代知の分類は、発生した損傷を、「診断法」を中心に、「どの骨が折れ」「どの関節が外れている」を記述し、その結果として「誰がこの分類を行ったのか」とするものである。

図1. にバドの分類にあるように、バドは、モンテギア脱臼骨折の分類を行っている。

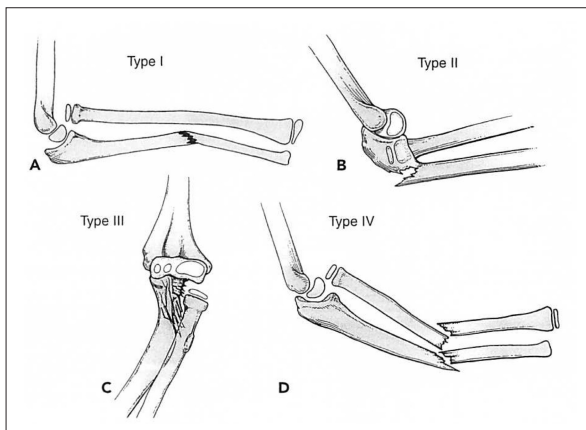


図1. Monteggia Fracture-Dislocations バドの分類

柔道整復の伝統性

本研究においては教材として、柔道整復師の施術対象となる、脱臼と骨折を併発した症例の「理論教育」を行った。授業目的は、モンテギア脱臼骨折論を展開する事にある。モンテギア脱臼骨折は、尺骨の上中1/3境界部の骨折に伴い、橈骨頭が脱臼をした症例である。図1.にあるバドの分類Type I.の板書授業を行った。それは、原因(型)に基づいて分類した、伸展型と屈曲型の2分類が、柔整理論教科書には紹介されており、レントゲン写真1.にある、脱臼骨折は、バド分類Type I. :モンテギア脱臼骨折伸展型と言える。

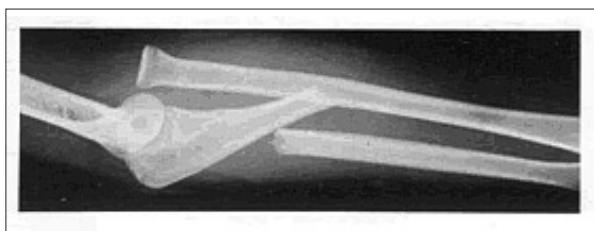


写真1. Monteggia Fracture-Dislocations レントゲン写真
東御セントラルクリニック出典

伝統的柔道整復術には、写真1.にあるMonteggia Fracture-Dislocationsの具体的施術法を記した資料は存在しない。理論、実技教科書においても、「神中整形外科学」由来の、整形外科理論である。

しかしながら、元来柔道整復師が行ってきた「治療」は、現代整形外科のそれとは違いがある。柔道整復術は、「脱臼や骨折を治しきる術」として継承された。これは、診断(所見、画像診断等)に基づき、治療を展開していく、近代では当然の治療過程ではなく、「施術」(いかにして治癒に導くのか)を先行させた、極めて「経験的」で「伝承的」な過程から始まる。つまり、柔道整復術の怪我の治療は、経験的観察眼で見立て、「施術」が行われている。[診断→治療→リハビリ]の、全過程は、[施術]に込められている。古くは、師匠から弟子に「直接身体から身体に」伝承された。

ほねつぎ術の今昔

モンテギア脱臼骨折の、施術(評価・整復・固定・後療・評価)はとても難しい。なぜなら、前腕部を構成している橈骨が脱臼し尺骨は骨折している状態にある。この現象の発生機序を考えると、手を衝く事で、介達外力が、尺骨・骨幹部に働き骨折させ、それが前方凸方向へ折り曲げられるように転位し、その骨

折端が、橈骨をはじき出すように前方へ脱臼させている。また、併発症として、神経損傷(橈骨、後骨間神経)の損傷を併発しやすいのである。

小児骨折の症例として、上腕骨顆上骨折(伸展型)が、その発生頻度、整復・固定の難易度、合併症の発生頻度等から「骨接ぎ」の技術達成目標とされてきた。修行中の弟子は師匠から「顆上骨折の施術が、しっかり出来れば、一人前だ。」と言われた程であるが、本症例はその顆上骨折より難しい。

現代柔道整復師の諸相をつぶさに観察してみると、「骨接ぎ」の技術伝承は、師匠から弟子への「皆伝」は出来ない。

五感を伸ばす授業展開

授業実践においては、講師の「冷静な教材分析を前提とした経験の伝授」を心掛けた。伝統技法の伝承の反省点は、師匠から弟子に直々に伝えられたため、「〇〇流」という流儀の組織建てが重要であった。しかし、現代「それは開かれている。」つまり、柔道整復学理論編(教科書)に、準ずる教育が、弟子(学生)のニーズに応えやすい。本授業では、基礎理論、臨床理論、整形外科理論を全て、講師サイドは、教材研究を済ませ、それを「自身の主観的臨床経験」に、「教科書と言う客観的資料で解き直す。」という、伝統医学講師ならではの自己調整的教材研究が必須である。その上で、「解剖学の作図」板書授業を行っている。

学生は「講師の経験を追体験していく」ように、学生自らの工夫でノートを記載していく。さらに、柔道整復国家試験に直結する脱臼理論や骨折理論を同時に語り、理解する為の舞台としてモンテギア脱臼骨折を伝えた。

写真2.3.は、五感を使い、感覚教育を意識した。板書授業である。

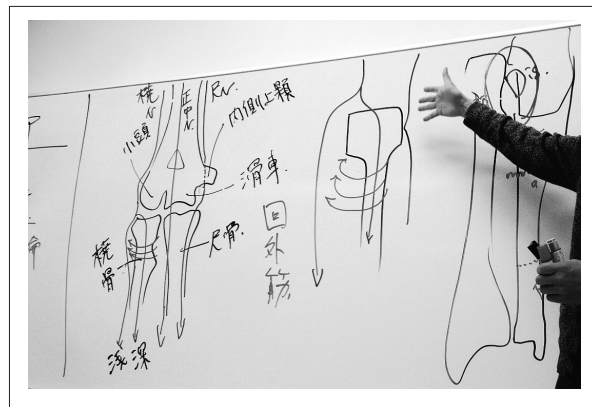


写真2. 実践記録 板書1.

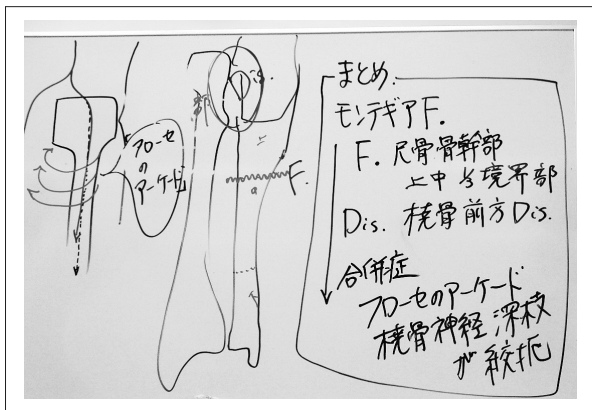


写真3. 実践記録 板書2.

学生の記録ノートから見えてきたもの

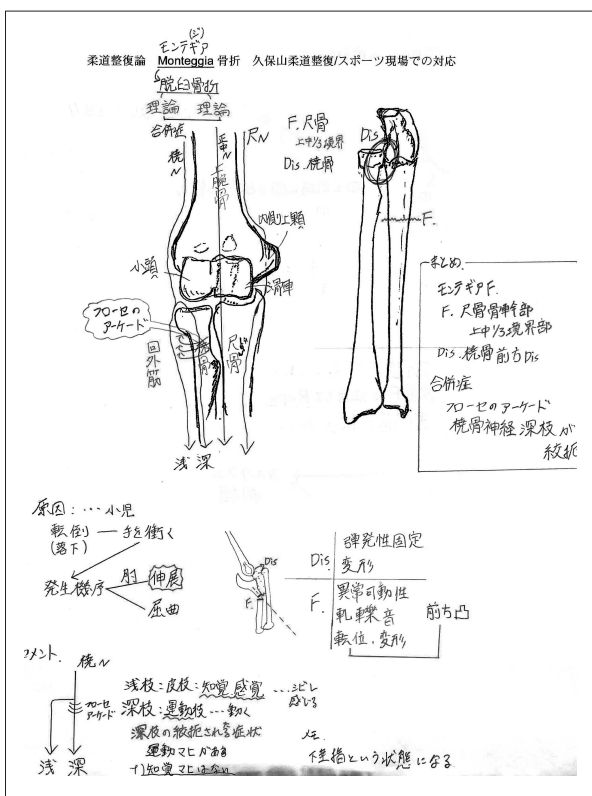


図3. 学生ノートから

臨床経験を「武勇伝」として学生に伝える事は容易である。前述した「自己調整的教材研究」は、国家試験合格と伝承性の両立が求められるものである。つまり、講師自身の臨床経験を国家試験合格用の用語に、翻訳して伝える必要がある。

本授業展開においては、「要するに板書授業である。」が、柔道整復国家試験に合格する為の学生ノート記述に、骨折や脱臼の理論だけでなく、臨床的展開の「経験知としての治療ビジョン」の伝授が行われて

いる事が見て取れた。

結論的には、体育学部で柔道整復を学ぶにあたり、感覚教育を意識した、体験的で総合学習的要素を考慮し、授業展開が必要であると考えられる。図3.のノートには、経験知の統合的伝授の可能性がみられた。

まとめ

一般に「経験の伝授」は、「教材の伝授」に対して「後回し」におかれてしまっているという現実はある。本研究では、伝統医学の教授法における、経験知の近代的教授法の模索にあった。

板書授業を行う際に「感覚教育」を応用的な解釈で持ち込み、講師自らの「自己調整的教材研究」の準備によって、柔道整復授業の「頭を練る体育」性を見出した。つまり、緻密な近代知の教材研究の上に、自身の経験を持ち込み、再考した上で「感覚教育」を意識した教授法の有効性が見出された。

参考文献

山本徳郎 技術としての身体 1999. pp64-89
 山本徳郎 都市的近代知的生活環境と身体 2004. 11. pp46-50
 山本徳郎 GutsMuthsとJahnにおける運動内容の違いが意味するもの 1972. 体育学研究vol. 17. pp1-10.
 神中正一 神中整形外科学 南山堂 1940.